

令和 5 年度総合教育会議議事録

1. 日 時 令和 6 年 3 月 1 8 日 (月) 10:00～11:30
2. 場 所 大田市民会館中ホール
3. 出 席 者 大田市長 楫野 弘和
教育長 武田 祐子
教育委員 梶 伸光
教育委員 仲野 義文
教育委員 岩谷 律子
教育委員 景山 浩充
教育委員 宮里 陽子

(事務局職員)

政策企画部長	尾田 英夫
教育部長	森 博之
教育部総務課長	縄 和仁
学校教育課長	川津 康正
学事・魅力化推進室長	山根 あずさ
学校教育課主査	俵 拓夫
社会教育課長	楫 隆宏
石見银山課長	大門 克典
山村留学センター長	矢田 孝之
学校給食センター長	後藤 裕之

4. 傍 聴 者 30名

5. 会議内容

テーマ

「多様な学びの場について」

楫野市長

令和 5 年度大田市総合教育会議の開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。教育委員の皆様には、年度末のお忙しいところ会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、平素から大田市の教育行政の推進にご尽力いただいていることに、この場をお借りしまして改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

本会議では毎年様々なテーマに基づきまして、皆様と議論させていただいているところでございます。本日は、多様な学びの場についてということでテーマを設定いたしました。

ご承知の通り、大田市では、出生数の大幅な減少、校舎施設の老朽化、全国的な教員不足など、学校を取り巻く状況の急速な変化に基づきまして、学校再編を進めているところでございます。

今後、再編が進むことによりまして、学校の規模、児童生徒同士や教員との距離感など子どもたちの学習環境の大きな変化が見込まれています。また保護者や子どもたちの学校や教育に対するニーズの多様化、ICT技術の進歩や教育への活用、不登校や学校に馴染めない児童生徒の増加などから、一人一人の成長段階や個性に応じた多様な学びの場を整えていくことが、学校再編と両輪で進めていかなければならない重要な課題となっていると認識しております。

本日は限られた時間ではございますが、忌憚のないご意見を聞かせていただき今後の取り組みに繋げていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、テーマの説明について事務局から説明をお願いします。

森部長

本日のテーマは「多様な学びの場について」でございます。画面をご覧ください。

これから子どもたちにどういう学びが必要か、国の中央教育審議会等で議論されています。その中で出ているのが、生産年齢人口、さらには年齢、人口の減少、グローバル化の進展、デジタル化・ICT技術の進展など、急速に変化する社会状況の中で、今の子どもたち、これから誕生する子どもたちが大人になっていく頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予測されます。

この厳しい挑戦の時代というのは、社会構造や雇用環境が大きく変化、そして、子どもたちが就くことになる職業のあり方についても、現在とは様変わりすることになるだろうということです。

様々な業務や場面で色々なトライがなされており、AI、ロボット、eスポーツなど新しい分野もございます。バーチャル、メタバースなどを活用した場が変わっていくだろうと思われれます。そういう中で、子どもたちの成長について、画一的な人材を育むのではなく、一人一人の多様性を原動力として、新たな価値を生み出すことが、我が国には必要になるだろうと思います。そのためには、他者と協働しながら価値の創造に挑んでいく、そして未来を切り開いていく力をつけることが求められます。

そうしたことを踏まえ、現在の学習指導要領の中では、主体的そして対話的で深い学びが必要であり、この三つの力をバランスよく育むこととしております。

一つ目が学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力、人間性です。二つ目が、実際の社会や生活で生きて働く知識や技能を身につけること。そして、三つ目が未知の状況にも対応できる力です。思考力、判断力、表現力、こういった力を身につけることです。この三つをバランスよく育てていくことが必要だということです。

そのために、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びが必要です。

一人一人の児童生徒が自分の可能性を認識する、そして他の人とあらゆる他者を価値のある存在として尊重しながら、他の人と協働して社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開くということが必要ということです。これらを一体的に充実していくことがこれからの教育に求められるということです。

個別最適な学びが必要ですが、指導の個別化、そして学習の個性化を行い、子ども一人一人の特性や学習指導、進度などに応じて指導方法や教材などの柔軟な提供を設定する、つまり、一人一人に応じた指導を行い、学習を個性化していくということです。そして、協働的

な学び、これは先ほどから申し上げていることです。

そういうことを進めていくには、ICT技術の活用、それから実習、実験、体験活動を通じた学びを進めることが必要となります。

総括いたしますと、これから迎える社会は、大きな変化があり、この変化に対応していくためには、子どもたちが社会を生き抜く力を身につけることが必要ということです。

生き抜く力は一人一人が互いを認め合って尊重し合いながら、他者との協働により身につけていくということが、一つの大きな視点です。そして一方で、全ての子どもたちの可能性を引き出すためには一人一人の発達の段階や個々の特性に応じた学びが必要であり、そのための多様な学びの場、あるいは多様な学びの機会の確保が重要になるということです。

この多様な学びの場について情報を共有していただき、様々な意見をいただきたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

楫野市長

ありがとうございました。続きまして資料の説明をお願いします。

川津課長

令和5年度島根県学力調査の結果についてご紹介します。

昨年12月に小学校は5、6年生、中学校は1年生を対象に本調査が行われました。

小学校は国語と算数、中学校は国語と算数に加え、英語の調査が行われました。

大田市の結果ですが、どの教科においても、県の平均を下回っているという状況です。

これは、平成26年度以降の国語の学年別の正答率です。グラフでは、島根県の平均を0として、大田市との正答率の差を表しています。令和3年度まではプラス2からマイナス4ポイントの中で推移していましたが、令和4年度、令和5年度は正答率が下がり気味であることがわかります。

次に、算数・数学の正答率の変化です。国語に比べると、振れ幅が大きく、0からマイナス8ポイント内で変化をしています。10年間で全体的に下がってきており、小学校5年生の段階で、既に県との差が大きくなっています。

続いて、英語の正答率の変化です。これも数学同様に振れ幅が大きく、0からマイナス9ポイント内で変化をしています。令和4年度以降はやや改善傾向が見られています。

次に、教科ごとの経年を追っていきます。

国語ですが、集団は違っても、経年を見ると同じような変化をしていることがわかります。令和4年度、令和5年度の5年生時を見ますと、その時点で既に正答率が低いといった状況です。

次に、算数数学の経年比較です。過去13年間の大田市の正答率の変化は、グラフの水色のような変化が多く見られました。しかし、ここ数年はやや変化の仕方が変わってきています。また、右下の表をご覧ください。基本学力調査の問題は、学習指導要領にのっとった問題が出されています。しかし、令和5年度の結果を見ると、目標値より10ポイントの差があります。

このことは大きな課題だと捉えています。10年前であれば、それほど全国と差がない指導方法だったのかもしれませんが、しかし、今も昔のような知識理解を中心とした指導を行ってはいは、今の学習指導要領にのっとった問題には対応できないと考えられます。

今、授業のあり方が問われています。

また、本日のデータのお示しすることはできませんが、家庭学習の様子について大田市の傾向としては、全国と比較して、家庭学習の時間が少なく、特に中学校 3 年生で全国と大きな差があります。この大きな傾向は、約 10 年前より同じ傾向が続いています。

最後に 1 日あたりのゲームに触れる時間についてご紹介いたします。

令和 4 年度、5 年度の表を見ますと、大田市では 2 時間以上ゲームに触れる児童生徒が、県全国と比べ高い傾向にあります。

また、右下の表にありますが、平成 26 年、27 年、28 年と比較すると、約 2 倍に数値が増えており、ゲームに触れる時間が増えていることがわかります。

縄総務課長

小中学校の不登校等の状況についてご説明を申し上げます。

文部科学省の令和 4 年度児童生徒の問題行動不登校等の生徒指導上の諸課題に関する調査の結果を抜粋したものです。全国状況では、小中学校における長期欠席者数は、令和 4 年度で 46 万人強となっており、令和 3 年度の 41 万人程度と比較すると約 1.1 倍となっています。このうち、不登校によるものは、29 万 9 千人強で、令和 3 年度の 24 万 4 千人程度と比較すると 1.2 倍で、長期欠席者の中でも不登校の割合の伸びが大きいという状況にあります。

小学校中学校別に見ると、小学校では令和 4 年度の不登校 10 万 5 千人強となっており、令和 3 年度と比較すると 1.3 倍となっています。また、中学校では 19 万 3 千人強となっており、令和 3 年度の 16 万 3 千人強と比較すると 1.2 倍になります。小学校での不登校の割合の伸び方が大きくなっています。

不登校は、このオレンジ色のグラフです。経年では、全国的にも年々増加しているという状況です。

こちらが千人あたりの不登校の児童生徒数のデータです。概ね令和 3 年度から急激に人数が伸びているという状況です。

大田市の状況についてですが、不登校あるいは学校になかなか通えない子どもの状況として令和 3 年度の不登校が 21 人でしたが、令和 4 年度には 42 人となり、倍増しているという状況です。出現率とありますが、これは全体の児童生徒に占める割合であり、県の不登校出現率 2.35 に対し、令和 4 年度の大田市は 2.76 となっており、県と比べて多いことが分かります。これを千人当たりになると、令和 5 年度は、28 人程度となり、全国の 17 人から見ても高い数値です。

次に、中学校が令和 3 年度 41 人、令和 4 年度が 44 人ということで若干の上昇です。全体で見ると、年度でばらつきがありますが増加傾向にあります。県の数値と比較すると、5.56% ですので、若干低くはなっていますが、上昇傾向にあるということで、このことはしっかりと考えていかなければならないところです。

こうした状況も考えながら、多様な学びの場、学びの機会についてご検討いただければと思います。説明については以上です。

楫野市長

それでは、これから意見交換していきたいと思います。色々な観点から資料の説明がありました。事前に配布された資料には、他に大田市の取り組みも書いてあります。特にテーマ

を絞りませんので、皆さん方が全体を通して感じられたことをお話しただいてから、その後議論を深めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

梶委員お願いします。

梶委員

本日の会議のテーマは、多様な学びの場ということですが、資料の中にも特例校や小中一貫校、義務教育学校などの内容がありました。

それら学校の外にある多様な学びの場について論じる前に、今ある学校の中を多様な学びの場の一つとして捉えて、学校の中に多様な学びの場を作っていく考え方で述べさせていただきたいと思えます。

学力調査の結果、不登校の状況なども説明に出てきましたので、そういったことも絡めて話させていただきたいと思えます。

多様な学びの場の共通の存在意義は何かと考えると、一人一人の子どもに目を向けて、子どもがやる気と力を伸ばしていく、そして社会の中で必要となる力を育てていく、これが必要な考え方ではないかと思えます。もちろん教育のねらいと、このことは一致しておりますが、これは、生徒指導と呼ばれている教育活動のねらいとまさに合致するものです。

私は、小中学校に勤めていましたが、昭和 50 年の中頃から平成の初めに、県内の中学校では、自分の進むべき道を迷っている生徒もいて、なかなか大変な時期もありました。

そんな時、先輩の先生が、生徒指導に大切なことを三つ教えてくださいました。色々ありますが、一番目は分かる授業をすることだと言われました。二番目は、教職員が一枚板になり、共通理解をして共通実践をすること。そして三番目が、家庭や地域との連携だと教えてくださいました。一番目が分かる授業なんだと驚きましたが、その先生は、授業がよく分かって楽しかったら、子どもは他の方向には走らない、みんなが笑顔で学校に来るだろうと言われました。自分の進むべき道を迷ったり、不登校になったりする要因は、そんなに単純なものではないですが、まずは授業の充実だろうと私も思いました。

分かる授業というのは何かと考えると、二つあります。もちろん教師がわかりやすく説明するというものがありますが、それ以外に二つあると思えます。一つは、一人一人の子どもに役割と出番があって、それが認められるという安心できる授業の雰囲気です。これがまず「分かる授業」の一つではないかと思えます。この雰囲気のことをある学者は支持的風土と言っています。二番目がそういった雰囲気の中で色々な考えを出しながら自分たちで問題を解決していくという、問題解決学習です。先ほどの説明でもありましたが、この道筋を授業の中で子どもたちに味あわせてあげることが大切なことではないかと思えます。まず、授業の雰囲気作りですが、数名のよく発言する子どもたちだけで授業を作っていくのではなく、みんなが参加するという授業にしていくことが大事ではないかと思えます。

具体的には、一人一人の子どもに実際に役割を持たせる。非常に簡単なことですが、授業の中でグループ活動をするときに、今日の進行役とか、記録役とか、発表役とか、指示棒を持たせるとか、発表の紙を持たせる役とかです。なんだ、そんなことかと思われると思いますが、それを行うことによってみんながお客さんではなく参加していることになります。能力とか個性の違いがあっても、なかなかそれができない子どももいますが、みんなの違いを認め、良いところを認めてみんなでやっていくという、そういったことが大事だと思えます。

こういったみんなで参加する授業を作ることによって、不登校とかそういったことになら

ないということの一助になるのではないかと思います。

それから二番目の問題解決学習です。先ほどの資料であったように、大田市の子どもたちはテレビゲームの時間が長く勉強時間が少ないということになると思います。大田市は、この対応として、学力育成に向け、学力育成プランに取り組んでいます。全市内の小・中学生が一生懸命授業研究に取り組んで、外部講師の方も招いてやっています。その成果も着実に上がっているということも聞きました。

令和 5 年度の第 2 回グループ育成会議の振り返りでは、課題と改善策は 10 項目ありましたが、5 項目を紹介させていただきます。

一つは、子どもたちの思考の流れに沿った授業の改善が大事ではないか。それから二番目は考えたことをなかなか言葉にできないことも多いので、言葉にしていくことも必要ではないか。

三番目は、習ったことを活用する場面です。習ったことを思い出して活かしていくこと。

四番目は、互いに学び合える良好な人間関係を作っていくことが大事ということです。五番目にプロセスを大切に子どもに説明させること。そういった五つのことが、特に私の頭に残りました。全く同感だと思いました。

やはり、子どもたちに不足してるのは勉強する時間です。それを補うのは、学校では、日々の授業の中でしか作れないだろうと思います。そして、みんなが参加して、自分たちで考えていく授業作りをやっていかなければいけないだろうと思います。

最後になりますが、素晴らしい例がありましたので、お借りしてきた資料でそれを紹介して終わりたいと思います。

6 年生の「算数の変わり方を調べて」という単元です。表を用いると規則性が分かる、類推によって全部調べなくてもいいという、算数を学ぶことの良さをつかむというものです。

鶴亀算を使った授業でしたので、その資料を紹介します。設問は、鶴と亀が合わせて 20 匹います。足の数は全部で 56 本でした。鶴と亀は何匹ずついますかというものです。昔皆さんもよくされたと思います。答えは、カメが 8、鶴が 12 です。計算すると足が 56 になると思います。こういった問題を解くときにまず大事なことは、既習事項です。どんなことを使ったらということを考えさせること。図を使うとか絵に描くとか、四角に表すとか色々ありますが、図に書くということが非常に大事で、図に表すことができればそれは式ができたと同じことです。

そういったことを教師は、意識してやっていくことが大事だと思います。この授業では、問題を解く方法として出たのが、表に表す、一つ一つ調べる、式に表すの三つでした。

資料をお見せします。一番目は式で表した子どもの発表です。発表した子どもは、一発で 8 という数字を偶然見つけて発表しました。そうするとみんなからどっと拍手が起きました。どうして 8 が出たのか聞かれて、偶然見つけたと言ったのでそこでトーンダウンしたのですが、でも、その子どもは一つ多い 9 と、一つ少ない 7 で計算したら、足の数が合わなかったからと言いました。そうすると、また、みんなからどっと拍手が起きたので、この子の面目が躍如されたそうです。発表した子どもは算数があまり得意ではなかったそうですが、これを契機に俄然頑張って、卒業文集に僕は算数が好きになったと書いたそうです。これが一つです。

二番目は、一つ一つ調べたグループです。鶴と亀の足をずっと調べて書いてあります。これは、実は表と同じです。線はありませんが、一つ一つ調べて表になっています。このグル

ープのいいところは、途中まで調べたら規則性が分かってきたので、あいだを省略しているところ。この類推する考え方が素晴らしいです。これは問題解決に非常に大事な考え方です。

三番目は、鶴と亀の数しか書いていませんでした。これも表です。でも答えを導くには暗算しかない。これを作った子どもたちは暗算で、答えを見つけたと思います。

四番目は、鶴の数、亀の数に足の数も正確に書いて、しかも合計まで書いた表を作って答えを導き出しています。

五番目は、同じように足の数も書いてますが、赤い字で規則性についても亀の数が増えれば足がいくつ増えるか書いてあります。

このように、色々な考え方がこの授業で出てきて、それぞれの良さとか、どれが一番使いやすいのかということを子どもたちが考えて、答えを出していくという、まさに問題解決の筋道を味わう授業です。これができたということです。雰囲気作りと問題解決学習の事例を紹介しました。

こうしたことを踏まえて、もう一度学校の中を多様な学びの場として考え、それに挑戦することが学校以外での学習にもつながっていくのではないかと思います。

楫野市長

ありがとうございました。せっかくですので、同じく多年にわたって教員として教育に携わってこられました岩谷委員お願いいたします。

岩谷委員

梶委員と同じように長年学校教育に携わってきた立場として、私は2点についてお話しさせていただきたいと思います。その前に、多様な学びとは何かということについて、私が考えていることを一つお話し、その後に意見をお話したいと思います。

多様な学びというのは、令和型の日本教育において、最も必要不可欠なものだと私は考えています。ですから、全ての学校で多様な学びが実現されているべきではないかと考えております。

現行の学習指導要領では、全ての子どもたちの可能性を引き出すために、個別最適な学びと協働的な学びを実現することが求められています。これは先ほど説明があったとおりです。

個別最適な学びとは何か。それは、自分の学び方が子どもたち自身にとって最適になるように、自分の特性や進度に応じて、内容や方法を選んだり、決めたりすることだと思っています。

このような学び方は、私達大人もしていることではないかと思います。何かやりたいことがあれば、例えば、庭を綺麗にしたいと思ったときに、どうやってするかというのを、それぞれ自分のやり方で調べて、美しい庭になるようにしようと思いがちながらやります。

子どもたちがこういう力を持った大人になるように、個別最適な学びの場を実現することが求められています。この個別最適な学びを実現するためには、各学校で多様な学び方や、多様な学びの場が必要になってきます。特定の学校だけではありません。全ての学校で多様な学びを実現されていることが求められています。

現在、市内の全ての学校において、全ての子どもたちの可能性を引き出すために、多様な学びを実現しようと日々努力しておられます。この1年、各学校の研究会等に参加させてい

いただきました。何うができなかった学校もありましたが、努力しておられない学校はないと感じています。それが私の多様な学びに対する、前提となる考え方です。

そこで二つ提案したいと思っています。

一つ目は、今あるものを活かすということ。

どこかで聞いたようなフレーズですが、大田市では、これまでも多様な学びを実現しようと実践を積み上げてきています。令和になってから始まったことではありません。私が現職の頃から、もっと前のことを言えば、私が子どもの頃から、この多様な学びを実現しようと努力を続けています。その積み上げてきたものを、令和になったから終わりといって切り捨てるのではなく、しっかり見直してその良さを活かすことが最も重要なことではないかと考えます。

例えば、三瓶地域では、もう何十年も前から、小学校と中学校が同じ校舎であって、小学生と中学生と一緒に学んでいます。目指す 15 歳の姿を、地域も職員も子どもたちも共通のイメージをもって、小中学校の繋がりを大切にした教育を進めてきています。運動会や文化祭の行事はもちろんですが、日常から、職員や子どもたちが深く関わり合いながら、互いの可能性を最大限に引き出そうと、それぞれが努力しています。

これがまさに個別最適な学びを実現しようとする姿ではないかなと思っています。三瓶という地域を学習の場として、地域も一体となって子どもたちの成長を支えています。

保育園も同じ校舎や近くにあるので、三瓶地域では、0 歳から 15 歳までの繋がりを大切にしたい学びを実現しようとしておられました。まさに、小中一貫教育につながる実践だと思っています。これがなくなってしまうのは残念です。このような 0 歳から 15 歳までの繋がりを大切に、地域一丸となった学びの場があるといいと思っています。

もう一つの例は、温泉津地域と大森地域です。ここは以前から石見銀山とその景観を題材にして、地域全体を教育の場、学びの場として、総がかりでの学びが実践されています。現在も地元の企業や大学、高校などと連携しながら、新しい学びの形や学びの場を作り出しておられます。このような地域を学習の場とする学びは、大森や温泉津だけではなく、全ての学校で行われているふるさと教育の中にもあります。こうした取り組みをしっかりと洗い出してその良さを活かしていくことが必要だと考えています。

二つ目は、教職員と管理職にも多様な学びの場が必要だと考えています。子どもたちの多様な学びの場を実現するには、教職員や管理職の指導力の更なる向上が必要不可欠です。教員の授業力が上がらないと、どのような学びの場があっても、うまく繋ぎ合わせることはできません。どんなに子どもたちを立派に育てようと思っても、指導力や授業力がないとできない。そのことが最も大事です。

大田市では、島根県立大学の齋藤一弥先生をお招きして、昨年度から研究会や授業作りの研修会を行っています。この様子を大田市小中学校教育サイトで情報発信もしておられます。私はこの 1 年、この会に頻繁に同行させていただきました。先生方の授業に対する意識が変わってきています。

もっと学びたい、学び続けて力をつけて、子どもたちとしっかり向き合いたいという意欲が高まっています。このことは、私が今年の最後に参加した校長会の研修会で、実際に参加された若い先生方がおっしゃっていました。多くの先生方がこうおっしゃっています。齋藤先生も大田市の先生方の意識が意欲に高まったと評価してくださっています。

小規模校勤務の先生が平日、研修会に参加しようと思うと非常に困難が伴います。そうい

う状況の中でも、確実に毎回参加者が増えてきています。これは意欲の高まりだと思います。「らとう会」という自主研修会にも多くの先生が参加され、熱心に授業作りについて、遅くまで語り合っておられると聞いています。このような学びを大田市の先生方が行っていることやもっと学びたいという意欲を持っておられることを多くの方にもっと知ってほしいと思っています。

批判だけではなく、こうやって学校現場にいる者が一生懸命努力して、自分に力をつけ、子どもたちと向き合いたい、そういう時間が欲しい、そういう場が欲しいと切に願っていることをぜひ知っていただきたいです。ぜひ多くの方に、先生方が努力している姿、子どもたちの学びが変わってきている様子を見に行ってください、先生方のこうした学びがもっともっと広がっていくように支えていく必要があると考えています。

先生方の学びの場は、学校だけにとどまらず、他校や幼稚園、高校も含めた、異校種間での研修や地元の企業でもできるのではないかと思います。幅広い学びの場があれば、本来先生方は意欲的に学ぶことができるのではないかと思います。大田市は、(株)バーチャリオンと提携をしておられると聞いています。その提携も活用していけば、例えば、石見銀山の下見に出かける時間がないときでもバーチャルを活用して調べることができます。銀山の色々なものがバーチャルで見ることができるようになれば、よりよい学習ができると思います。

こうやって意欲が高まっている今だからこそ、ぜひ、教職員と管理職の指導力や授業力を高めるための多様な学びの場を作る必要があると考えています。

私は、以上の二つのことを提案したいと思います。

楫野市長

ありがとうございました。教育現場をよくご存じの委員からのお話でした。

私も職員の能力を高める管理職の立場の時もあり、市長としても心がけていますが、職員一人一人が能力アップ・スキルアップすることは全体がスキルアップしていくことになります。まずは、授業力を高めるということが、学校現場では一番大切なことだと感じ取らせていただきました。次は、親や市民の立場からお話していただきたいと思います。

仲野委員、お願いいたします。

仲野委員

私も学校に関わっていたことがありますので2人の委員の意見は、まさにそのとおりだと思います。子どもたちは、魅力的な授業だとすごく興味を持ち学習意欲も高まっていくと思います。そういう点からも小学校の先生がすごく大変だと思うのは、色々な教科の授業をみないといけない。中学校や高校は教科担任制なので、一つの教科をより専門的に学んで、それを授業でできるというところはすごく有利だと思います。小学校も教科担任制が将来的には必要ではないかと個人的には思っています。

そして、授業で子どもたちがどういうところに興味を持つかだと思います。私は銀山学習を通して小学校とか中学校で教えることがあります、身近なものが教材だと非常に子どもたちの関心というのは高まっていきます。

そういう意味では地域の歴史や自然、文化に教材として使えるものがたくさんあるのだろうと思います。今は、残念ながら、ふるさと教育とか、総合的な学習の時間だけに使われて

いるので、もったいないと思っています。

やはりこうしたものを教科の中に落とし込んでいくという作業が必要だと思います。学習指導要領の中に、地域の歴史や文化をきちんと落とし込むという作業が必要だということです。学校で行うのは、なかなか難しいので博物館や三瓶交流の家などの社会教育の機関と連携をとりながら各教科に落とし込める地域教材というものを開発していくことは、子どもたちの学習意欲を高める一つの手段であると思います。

もう一つは、先生方もICTの活用と言いながらも、なかなか十分に活用できてないところですよ。例えば、国会図書館のジャパンサーチのような、社会科の教員が利用するようなサイトも色々あります。教育委員会で少し調査して、学校に情報提供することによって、ICTの活用というのはもっと進んでいくのではないかと思います。

学校がどういう場なのか考えると、子どもたちの自己実現を手助けしてあげる場だと思います。重要なことは、学校では体系的な学びができることだと思います。一方で体系的な学び以外で一つのことを深めていこうとするときには、学校では限界がある。そのために地域の中で学べる環境を作っていく必要があるのではないかと思います。

近年はデジタルアートがすごく流行っていますが、学校の美術の時間では教えることはできません。だからこそ、学校以外の場所で子どもたちが学べるような環境を作っていく必要があります。それは単なるボランティアというレベルではなく、地域の産業として、都会では塾とか色々ありますが、同じように、利用の料金は別として、一つの産業として育てていくことも必要です。これからは、そういう意味でデジタルも含めて、地域社会全体で取り組んでいく必要があるのではないかと思います。

楫野市長

続きまして、景山委員いかがでしょうか。

景山委員

多様な学びというテーマなので、多様という部分についてお話しさせていただきます。我々大人が思っている多様と子どもや若者が思っている多様は、おそらく違っていると思います。不登校の話にも繋がることです。

一つ例を出すと、芸能人に「あのちゃん」という方がいます。あの方は女性ですけど、自分のことを「僕」と言います。それは、個性だと思います。「あのちゃん」は、それでいいめられて、自分を変えるのが嫌で不登校になりました。

今回の話に出ている、個性を認めるとか、多様という部分で言うと、それを認めるということだと思います。

それを学校で認めるのは大変な覚悟です。「あなた、女の子だから僕じゃないでしょう。」ではなく、「それでいいんですよ。」と言えること。それが多様ということだと思います。ですから、教育での多様とは、教育での多様に向かうまでの子どもへ「それでいいんだよ。」という覚悟を大人が持つことが必要だと感じました。

楫野市長

そうですね。高校の制服も変わってきており、ブレザー式など男性でも女性でも使えるようになっています。女性だからスカートを使わないといけないではなく、そういうことも含

めて、大人が子どもたちの個性を発揮する場をしっかりと作ってあげるということも非常に大事だと思います。我々の中にある固定観念をどう打破できるかが大切になります。

宮里委員お願いいたします。

宮里委員

教育委員になって感じたことは、先生たちが本当にやる気を持って、教育の現場に立っているのだということです。それまで気づかなかったというわけではありませんが。

先日、先生たちの1年の研修発表の場があり出席させて頂き、大変印象的だった言葉が「教育委員の皆さん、水曜日の部活をなしにしてください。」ということでした。どういうことだろうと思って伺うと、「自分たちにはスキルアップする時間がないんです。」とおっしゃっていました。子どもの学びもですが、教職員のスキルアップする時間を作ってほしいという言葉聞いたときに、保護者の立場では先生たちが子どもを早く帰して自分の時間を増やそうとしているのではないかという思いが先行してしまいましたので、なぜ働き方改革をこんなに進めるんだと、強く思っていた自分がいました。ですが、その発言により先生たちはこのような想いで働き方改革を進めておられるんだと初めて知り、もっと保護者の私達や地域の皆さんも含めてこのことを知るべきだと強く感じました。この機会にこのことを発言の中に入れられたことを大変嬉しく思います。

先生たちに敬意を払ったうえで、多様な学びの場について考えるにあたって、私は母親という立場もありますので、この資料をいただいたときに娘と少し話しました。資料には不登校ということがありましたので、なぜ学校に行きにくくなるのかなどのお話をしました。学校がどんな場所だったらいいのか娘に聞いてみたところ、学校が楽しくてわくわくする場であれば行きたいということでした。これは本当に純粋な答えだと感じました。大人の私達が子どもたちのやる気を育てる場を作っていくのが多様な学びの場について必要なところではないだろうか思いました。どんな学校だったらいいのかという話をしたところ、「宿題がなければいいな。」「あと時間割を自分たちで決めたらいいな。」と言われました。

また、私達の大人の活動が伝わっていたのか「自然豊かな大田市にいますので、もっと外での体験の場があったらいいな。」「地域の頑張っている方がおられるので、そういう方たちと関わる学びの場があったらいいな。」とも言われました。

ふるさと教育が子ども達は大変大好きで、銀山学習で「いも代官」のことを聞いてきたら、私に話してくれました。学びの場でそういう場があると自然に大田市の歴史を学ぶことができ、愛着が湧くと思います。

先日、高校で地域の皆さんとのトーク会のような会が開催され出席しました。大田市の好きな場所についての質問がありまして、「世界遺産もあるし、日本遺産もある。」と回答しました。すると「日本遺産って何ですか。」と聞かれて、知らないことに驚きました。こんなに資源があるのに、学びの場で得ることがなかったことに少し疑問に思った部分もあり、大田市には歴史がたくさんありいい場所があるということを伝えました。小中高で大田市のことを学べる時間は削らないで欲しいと思いました。

また、母の立場からとても食に関心があります。給食が美味しいと給食を食べるだけでも学校に行こうかなという気持ちになるのではないかと思います。

これらを総合的に言葉にすると、自主性を育てて、自分のやりたいことを実現できる場所が教育の場であると学校が楽しい場所になると思います。個人的に母親の想いとしては、大

田市の自然を活かした体験と食の大切さを守っている学校があったらいいと思います。畑で作ってできたものを給食に活用するような体験ができる学校もあったらいいと思います。

楫野市長

保護者の方は、学校を知ってるようで知らないといったことや、教員がどういう考えを持っているのか、どういう生活をしているのかよく分かっていないということは実態としてあると思います。保護者や地域が関わる学校運営協議会もありますが、お互いが共通認識を持たないとなかなか同じ方向に向かわないので、そこは大きな課題だと思いました。

それでは、教育長から委員の皆さんの意見をお聞きしての意見をお願いします。

武田教育長

皆さんどうもありがとうございました。先ほど説明にもありました国が求めている教育、それは皆さんの期待でもあると思います。その一方で、子どもがすごく変わってきている現実があって、子どもたちが非常に多様化して、学び方とか進路とか興味関心も一人一人で大変違ってきています。現実を目の当たりにすると、学校自体も変わっていかなければならないと思います。もっと柔軟さが必要であるとも思っています。先ほど梶委員、岩谷委員が言われたように、学校こそが多様な場であるというのは非常に賛同するところです。

市内に、学校再編の中で魅力的な学校が作っていく、このことは私自身が思い描く将来の青写真です。一方で、目の前の子どもたちの、学力とか不登校という喫緊の課題を目の当たりにすると、もっと速くスピード感を持ってできることからやっていかなければいけない、子どもたちの多くの受け皿を作っていかなければいけないと思います。それは大人の使命ではないかという思いが、本当に年々強くなっています。

そこで今日は、具体的に何ができるかというのを考えて提案しようと思いました。

一つは、学校の教育こそ多様な学びの場として、自分のたちの学校に新たな受け皿としてどう織り込んでいけるかということを考えてほしいことです。現在、教育委員会が窓口となって、既に様々なところと提携を進めています。先ほど（株）バーチャリオンとの提携の話が出ましたが、来年度の造形大会などで（株）バーチャリオンとの提携を活かし、子どもたちに図工の学習をただ見せるのではなく、バーチャルを活用した作品制作をさせてみるというようなことを入れることはできないか思っています。あるいは、日体大との連携を活かして体育の学習に、この単元はこの先生の指導を受けてやってみようといった具体的な発想を持っていただくと、子どもも喜ぶし、働き方改革に逆行するものではなく、教職員の人材育成、あるいは自分たちの指導力向上にも繋がるのではないかと思います。

さらに、先般、県立大学、大田高校、邇摩高校、市内の小中学校の教育をつかさどる教育委員会で連携協定を締結しました。私は、広く市民団体や企業などにこの話をしています。つまり、教育を教育委員会とか学校関係者が語るだけではなく、企業や地域の人たちにも教育に関わってほしいと思います。あるいは私達がそれを打ち出していくことだと思います。

大学が市にはありませんが、例えば小中学生が高校生や大学生のやり取りを見る、あるいは高校生は大学生がどのようなことを考えて、どんな思いで勉強しているのか見るということは非常に刺激的なことになると思っています。提携によってそれができるのです。今は、大田市の連携に7大学ぐらいが来ています。高校生と大学生がコラボできるチャンスはたくさんあります。

他にも、研究フィールドに大森、三瓶、温泉津などを使ってもらえば、そこにある小中学校へ先生方に来てもらったり、大学生に自分たちの銀山学習や総合学習を指導してもらったり、コメントやアドバイスしてもらったりしてはいかがでしょうか。また、中日の出店や登録 20 周年、発見 500 年の企画を、小中高生、大学生のメンバーで企画するということなどを考えてみるとどうでしょうか。大田市には、「J O いんつ ♪」というグループがありますが、これからの活動にも組み込んでいけると思っています。

2 月上旬に、関西学院大の先生が来られて授業していただき、初めて大田高校にも声をかけて参加していただきました。当日は、青森、岩手、広島の高校生が大田市に来られて宿泊し、大森の交流センターの中で学生と一緒に「豊かさとは何だろう。」ということをテーマに話し合う機会がありました。PR を充実させることで、今後はこのような機会を活用していただけるのではないかと考えています。

不登校につきましては、小学校の発現率が増加しています。それが継続して、中学校も不登校になる、学校に行けないという傾向が出てくるという危機感もあります。ここで踏ん張って、引きこもらせず、外に子どもたちを出していくという努力が私達にも必要だと思います。例えば、三瓶交流の家とかサヒメルや山村留学センターの中期体験などに参加することなどが考えられます。また、将来的には、まちづくりセンターの色々な事業に参加した場合は出校日扱いすることによって、生きる力を子どもたちが様々な地域の大人から学べるようになります。もしかしたら大人自身も元気をもらえるかもしれないと思っています。

また、大田市には、あすなろ教室があります。以前から、そこで学ぶ子どもたちがもっと地域に関わっていくことも必要だと考えていますが、そこには、学校に行けないことは非常に恥ずかしいことだとか、いけないことだという雰囲気がまだまだあるのではないかと、それは、大人や地域の責任ではないかとも思います。ですから、このような授業に、あすなろの子どもたちが親子遠足で交流の家に行ってそのイベントに参加することやあすなろ教室全体で秋の遠足に、または校外活動で、山村留学センターの子どもたちと触れ合って、そこに泊まることができれば泊まってみるとか、サヒメルで理科の勉強をするなど希望する子にはそういう受け皿を作りたいと思います。また、オンライン授業にチャレンジするとか、You tube など様々なコンテンツがネット上にあるので、それを使って学習が展開できないかなどといったことも考えてみたいと思います。

次に、学力についてです。子どもたちは学ぶ場所を求めていると思います。

図書館がコロナで制限された時に「ふれあい会館」で子どもたちが学び出しました。そこに行ってみると、非常に子どもたちが仲良く、学校や学年を越えて、笑いながら勉強していました。子どもたちに聞いたところ、家で一人黙ってするよりこういう環境が勉強しやすいということでした。大人の感覚とは違っています。市内の図書館も Wi-Fi を付けました。今後、「ふれあい会館」、「あすてらす」のロビー、各地域のまちづくりセンターに学べる場を作り、そこに塾の先生に行ってもらうなどの事業を進めてはどうかと思っています。

先日、夜間中学校にお伺いしたところ、40 代、50 代、60 代、70 代、80 代の方 1 人ずつ合計 5 人来てくださっていました。参加されるのはどういう理由なのか聞くと、子どもに勉強を教えてやりたいからということでした。さらに、他の市から中学生の見学がありました。残念ながら地元の小中高は使っていませんでした。生徒 1 人に対して 2 人ずつボランティアの先生が担当され、さらに控え室で先生方が 5、6 人待機しておられました。夜間中学校へ参加いただくと、地域のまちづくりセンターでも学びの場ができるのではないかと考えている

ところでは。

また、大切な視点として、学級が落ち着かないと、安心して授業が受けられず学力に結びつかないことがあります。あるいは、算数の成績の結果と実は国語の読み取りの力と関連していることなどがあります。

さらに、子どもたちの生活リズムが学力に関係します。学校保健委員会で、大田市の養護の先生たちが睡眠の調査をしてくださいました。小中学生全員と保護者対象の調査です。その結果、子どもの生活が、遅寝遅起きの傾向になっていることが分かりました。学年が上がるごとにその傾向が強くなっています。また、メディアの接触も増えています。さらに睡眠が短くなればなるほど、学力、それからスポーツの技術的なことなどにも大変な影響が出ることを島根県1万人の子どもを調べられた先生がおっしゃっていました。

大田市もその状況が生じていて、食時・睡眠という基本的な生活習慣というところにもっと力を入れていけば、違う側面で学力のアップを期待できると思っています。

楫野市長

皆さん方のお考えをお聞きしましたので、私なりのお話をさせていただきます。

私は、子どもたちがなぜ勉強しなければならないのか理解してないから勉強しないんだということを一貫して思っています。子どもたちは、学びたい、あるいは勉強しなければならないと思う年齢がいつなのかというのは、個人差があります。私には、来年、小学校へ行く孫がいますが、昨日、手紙をくれました。誤字というかまだ習ってないのですが、文字を書いて手紙をくれました。「また遊ぼうね。」など、多分そう書いてあるのだろうと類推しました。結局、学びたい時にきちんと学ぶ場と環境を整えて、上手に指導してあげると、子どもたちは勉強し始めると思います。

どうしても親の立場では、学校へ行きなさい、勉強しなさいと言ってきました。一方で、なぜしなければならないのかということは言ってきませんでした。逆に大人になってからでも勉強しなければなりません。私も勉強しないと今の仕事はできません。新しい技術とか物事の進め方もどんどん変わっていきますので、一生勉強し続けなければならないと思っています。何となく、我々の時代は、いい大学へ行っていい企業に就職すれば楽になるからということ言われた覚えがあります。それは、実は違って、社会人になってからこそもっともっと勉強しなければならないと思います。

そのことをきちんと大人が子どもたちに伝えているのかと思います。本当に学びたいと思わせるように指導するとか、大学生や他年代と付き合うことにより、なりたい自分というものが分かってきたりすると学びたいと思うのではないかと思います。

そのためには、小さな頃から色々な世代、特に大人たちと、あるいはその近い世代でもいいですが、小学生なら中学生、高校生では大学生などの形で付き合っていくことが大事だと思っています。

それから、不登校は誰のせいかという話はあまりするべきではないと思っています。問題は、不登校で学校へずっと行けなくても、私は大人になって、きちんと自立して生活ができればそれでいいだろうと思っています。「中学校には行かなくてもユーチューバーとして生活している。」と全国放送でお父さんが言っていた子どもがいますが、今は、学校に行っているようです。学校が楽しくなったらいいです。そういうことではないかと思っています。

学校側もそういった不登校の子たちが帰って来られるような雰囲気を作って、逆に不登校

でも学ぶ場や多様な場をどうしたら作れるかというのは大きな論点だと思います。

大田市には、あすなろ教室がありますが、これだけでは不十分だと思っています。教育長も発言したとおりオンライン授業なども、これからの技術の活用もできるとしています。

第一中学校や志学中学校の授業に参加して二年目になります。これは、庁舎問題、公共施設の適正化を学んでいる子どもたちです。そのアンケートで、「どういう施設が欲しいか。」という設問に対して「学びの場」という答えが多くありました。気軽に使える施設がほしい。大田市の図書館ではスペースが少ない。だから、気軽に行ってそこで勉強できる場所が欲しいというのが一番でした。それを踏まえて、駅前に整備することになっている庁舎には、多目的に使えるようなスペース、子どもたちだけではなく、大人も来て気軽に交流できるスペースの設置を検討中です。このことは、第一中学校の子どもたちが「気軽に行って勉強するスペースがない。」とアンケートに答えてくれたからだと思っています。

我々は、そうした子どもたちの期待に応えていかなければならない。ただ、それは新しい箱を作るという意味ではなく、地域でもやり方によっては、そうしたことを考えることができるかもしれません。また、宮里委員が取り組んでおられる地域食堂などの取り組みで多世代が集まる場を色々と作っていくことも考えられると思います。

教員についてですが、皆さんが発言されたとおり教員のスキルアップの場が欲しいと願っています。教員の働き方改革で、労働時間の削減だけを目的にしているところがありますが、やはり、社会人も学ばなければなりません。教育の方法も全然違います。解を求めるやり方、解の導き方も、我々の時とは違います。私も子どもたちに教えてみたところ、自分が学んできたやり方と違うことを子どもたちは学んできているので、なかなか教えるに苦しかったことを覚えています。だからこそ、教員がスキルアップの場をどう確保していくかというのは本当に重要だと思います。

今日のテーマは、多様な学びの場の話ですが、多方面から意見をいただいて、さらに深める必要がありますし、範囲や観点も様々ありますので、この場でまとめることはできません。学校再編と併せて、大田市の教育をどう良くしていくのかという観点でこれからも教育委員の皆様には、色々と議論させていただいて、ご提案をいただかなければならないと思っています。また、こういう教育会議という場だけでなく、予算を所管する市長部局とあらゆる観点を議論をさせていただきたいとも思っています。

引き続きご協力よろしくお願い申し上げます。もう少し時間があれば、皆さん方に更にお話を伺いたいところですが、時間が参りましたので、事務局に進行を返します。

部長

皆様にはそれぞれの立場、また、ご経験から想い、あるいはお考えを述べていただき、誠にありがとうございます。本当に中身の濃い会議であったと思います。また会場の皆様におかれましても熱心にご聴講いただきまして誠にありがとうございました。

以上をもちまして令和5年度大田市総合教育会議を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。